代々木病院の理念
ヒューマニズムにもとづく医療・介護の実践

くらしと健康

発行 医療法人財団 東京勤労者医療会 1部60円
〒151―0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷1―30―7
TEL03(3404)7661
E-mail address　yo_sosiki@tokyo-kinikai.com
友の会会員は会費に購読料がふくまれています。

患者の人権と安全な医療を受ける権利を守ろう！

2010年度 千駄ケ谷地域医療安全大会

昨年に引き続き、12月15日（水）に日本共産党本部2階多目的ホールにて「千駄ケ谷地域医療安全大会」を開催しました。87名の職員がつどい交流を深めました。

講演に集中する参加者。会場はほぼ満席

多剤耐性菌について

今回は、感染研修会もかねた開催とし、「多剤耐性菌（☞1）」について日頃、検査業務を委託している病体生理研究所の細菌室・主任　安斎栄子氏に講演をお願いしました。

耐性菌についての基本的な知識、とくに最近話題となった「多剤耐性アシネトバクター属菌」について、特徴や耐性化率（☞2）、医療従事者が感染に対して注意すべきことなどのお話がありました。手洗いなどの「標準的予防策」と「院内感染の調査と評価および改善」が重要だということを強調されていました。

講演後、「代々木病院をはじめ民医連での耐性化率は低く、『がんばっているんだなあ』といつも感じています。」と言っていただき、日頃の奮闘に確信をもつことができました。

千駄ケ谷地域での交流

このほか、各職場での医療事故防止の取り組みについての報告、交流を深めました。

代々木病院外来では、医師、看護師、放射線技師、検査技師、医療事務との連携が重要であり、会議や学習会を通して事故防止に努めているとのこと。

回復期リハビリ病棟は、入院後初期に病室で転倒が圧倒的に多いことの分析から、転倒対策プロジェクトチームによる入院時の患者さんの日常生活動作を評価し、カンファレンス、病室内見回りなどの取り組みにより、転倒件数が減少したとのこと。

通所リハビリテーション室は、医療安全の研修会の受講を機に、「患者さんの人権を守る」という立場から取り組みを行なっています。

横断的な組織による安全文化の構築に、これからも努力していきたいと思っております。

代々木病院
医療安全管理者
清水健一

安斎栄子氏による講演

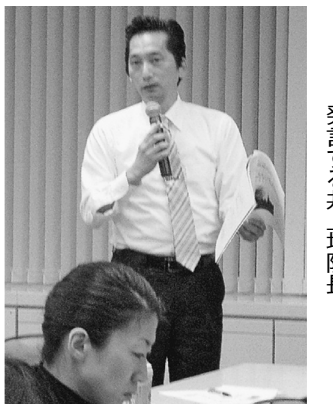
原因の分析、防止策の検討を行なっているとのこと。

代々木歯科からは、2002年に安全委員会を設立し、安全や感染に対して取り組んできた成果を発表していただきました。

☆

我々が所属する全日本民主医療機関連合会は、医療安全について

発表する妹尾ゆかり歯科医師


発言する井上均院長

（☞1）多剤耐性菌：細菌のうち、変異して、多くの抗菌薬（抗生剤）がきかなくなった細菌。（厚生労働省のホームページから）

（☞2）耐性化率：検査時に細菌の検体全体の中で、薬剤に対して耐性する割合。

講演

「薬剤耐性菌と院内感染対策」
講師：安斎栄子氏（病態生理研究所　細菌室主任　認定臨床微生物検査技師）

各職場からの報告

［1］「患者さんが中心の外来をめざして～他職種との連携～」
―看護師　赤羽恵（代々木病院　外来）―

［2］「回復期リハビリテーション病棟における転倒対策の取り組み」
―作業療法士　小林未央（代々木病院　回復期リハビリテーション病棟）―

［3］「変わる！ヒヤリ・ハットとリスクマネージメント」
―介護福祉士　工藤全展（代々木病院　通所リハビリテーション室）―

［4］「歯科における安全の取り組み」
―歯科医師　妹尾ゆかり（代々木歯科）―

手術台

「見えないけれど観えるもの」（やどかり出版）は「きょうされん」専務理事の藤井克徳さんの著作である。折々に書き溜めた障害者問題に関する鋭い指摘が詰っている。氏は、もともと弱視であったが数年前から全盲状態である▼そうなってから一層、障害者運動のリーダーとして輝きを増している。「見えなくなって」ますます「観える」のであろう。「見えるのに（在るのに）観えない」事もある。先入見を持っている、あるいは定式に捉われると、もっと大切なことが「ある」のを見落とす▼医療の現場ではつきものである。「見えすぎて（見過ぎて）、観えないこと」もある。活字や映像でシャワーのように情報を浴びると「何が肝心なのかが、見えなくなる」ばかりでなく、必要なことを選択するのさえ億劫になる▼なぜ億劫になるのか考えてみると、夢や目標を定め難い時代の「閉塞感」に押し潰された個の「無力感」に行き着く。二月の自戒である。内面から日本の自壊が始まる嫌な予感しきりである。（ま）